

仕事も家庭もボランティアも 生きることに自体が私の趣味です

エイボン地域貢献賞に入賞した秋元稔子さんは、仕事と家庭、

そして地域のボランティア活動に大忙し。

「楽しくなければ生きていく甲斐がないでしょうー」と、

ひまわりの花のように明るい笑顔でライフ&ワークを語ってくださいました。

秋元稔子さん

(エイボン・栃木県宇都宮市)



いれば忘れられた——それほど仕事が楽しくて、お客様との出会いが楽しくて。

当時、千葉敦子さんのエッセイを読み、自分の姿と比べていました。ニューヨークでジャーナリストの仕事が続けながら、毅然として乳がん闘う千葉さんにあこがれていました。

人間、どうせ寿命は決まっています。だけれだって病気で死にます。それなら年老いてボケるよりも、若くして乳がんで死ぬほうがいいなどと考えました。いまだから笑って話せますが、がんを告知された後、家族や周りの人たちが急に優しくなったので、「もう危ないんだ」と覚悟をしたものです。不思議な縁を感じます。エイボンは乳がんの早期

発見を呼びかけるピンクリボン運動をずっと続けています。あれから20年、どうやら私のからだは死ぬのを忘れてしまったようです。

ステージ1

がんを克服して

エイボンレディの仕事と出会ったのは平成2年、私が48歳のときでした。忘れられない年です。乳がんを宣告されたのです。そうとは知らない友人からエイボンを紹介され、なぜか心が動きました。じつとしていても、動いていても、進むものは進む。それなら、何かやらずにはいられないと思いました。悲壮感をもつ暇なんてありませんでした。動いて

ステージ2

仕事は三方両得で

モーレッツに働いていたわけではありません。自分の利益だけを考え、根こそぎお客様を獲得するようなり方は、私には無理。好みじゃありません。押し付けでなく、さりげなくがいい。お客様に「良かったわ」と喜んでいただけるのが一番の報酬。お客様



人形劇の練習風景



ボランティアの仲間たちと秋元さん

におトクがあつて、私にもあり、そして会社にもある。三方両得なんです。

いまはむしろボランティアと民生委員の活動に力を入れていきます。仕事は、たまにお友だちから注文をいただければ、「わかった。了解！」と2つ返事で引き受け、商品をお届けしています。「私はエイボンの回し者よ」と、冗談めかしてさりげなく商品をおすすめするのがワタシ流です。

もしもボランティアも民生委員もやらずに仕事一筋だったら、「ビルを建ててあげるわよ」と夫に言うたぐらい。たぶん、やればもつとできたと思うけれど、私は仕事だけじゃなく、生きることを全部楽し

みたいの。夫は、もつと家にいてほしいと思つてみるみたい。私つて、つい暴走してしまうので、心配かけないように自制しています。

ステージ3 地域でボランティア

30年近く、地域でボランティアを続けてきました。

「0歳から百歳まで読書の喜びを！」をスローガンにした本の読み聞かせ活動です。保育園や小学校、高齢者や障害者の施設を訪問し、絵本の朗読のほか、ミュージカル、人形劇、腹話術、紙芝居、七夕などの季節の行事にちなんだイベントなどを行なっています。舞台装置から何から全部、手作りです。

本との出会いは、その人の人生を大きく変えてしまうことがあるから、良い本と出会ってほしいの。子どもたちからファンレターをもらうこともありま

すよ。重度心身障害病棟の子どもたちを訪問したときには、寄せ書きをいただきました。いまも読むと子どもたちの声が聞こえてくるよ

うです。

ボランティアのメンバーは全部で13人。最高齢が88歳で、平均年齢は60歳ぐらいです。民生委員の活動が忙しくなってきたので、私は代表としてのお役目を引退したので、私も、公演のまぎわになると、やれ音響係が足りないとか、キャストをお願いなどと言われ、結局は引つ張り出されてしま

秋元さんのある1週間

- 月** 民生委員の研修旅行（乳頭温泉泊）から帰宅
民生委員として4軒訪問。電動アシスト自転車を買ってよかった！
- 水** 小学校の人形劇の準備で舞台づくり
エイボンレディの新人歓迎会に参加
- 木** エイボン商品をご近所のお客様に配達した後、民生委員の活動で5軒訪問
- 土** 埼玉に住む二女が泊まりに来る
東林公園見学

楽しいからやっちゃう。健康だから、できるんですね。もつと年をとれば、だれでも病気になるんですが、クヨクヨ考えてもしかたがない。気のもちようです。

民生委員としては、母子家庭、独居老人の家庭、老老介護の家庭などを含め約三百五十世帯受け持っています。私は人と会って話を聞くことが大好きで、苦手なタイプはいません。色々な人とお付き合いすると、驚きや発見の連続です。見たくないものも見ますが、根が楽道家だから、自分の人生経験の幅が広がるのがうれしいのです。

私の座右の銘は、「事をなすに刻苦は無用にして、事を楽しむべきなり」。司馬遼太郎の言葉で、私にとっては大ナツトク！ 楽しくなければ生きていく甲斐がないでしょう。何でも楽しめちゃうのが私の特技で、生きること自体が私の趣味です。

プロフィール◎1942年生まれ。三女が小さいころ家庭文庫活動に関わる。1983年、地域のコミュニティセンターで本の貸し出しや読み聞かせをするボランティア—ICC文庫—設立のメンバーとなる。1996年より文庫代表を務め、小学校や幼稚園、養護施設などに出前公演を続けている。